

平成 29 年 9 月 1 日

京口門だより No. 47

立秋もすぎ、処暑もすぎ、野分の季節になってきましたが、残暑はきびしく夏バテをきたしやすい時期でもあります。先月号でも申しましたように夏バテで困っておられる方はお申し出ください。

「吹かれ来し野分の蜂にさされけり」(星野立子)

夏から秋にかけては野外でよく虫に刺され皮膚病を起こすことがあります。ひどい虫刺されになると病院ではステロイド剤の点滴をすることがあります。重いじんましんやほかの皮膚病でも皮膚科ではステロイド剤がよく使われます。ここでいうステロイド剤とは、副腎皮質ホルモン剤のことです。商品名はいろいろな名前がありますが、注射薬、口から飲む製剤、塗り薬として用いる製剤などあります。副腎皮質ホルモンというからには、われわれの体内の副腎という腎臓の上部にある小さな器官から分泌されるものと同じです。それを体の外から与えたり、塗ったりするわけです。

比較的新しく用いられるようになった薬です。1971 (昭和 46) 年アメリカの医学者のサザーランドという人が初めてその有効性を発表して、ノーベル賞をもらいました。ちょうど私が医学部を卒業した頃で、ずいぶん話題となり、さまざまな治りにくい病気に用いて劇的に治すことのできる夢のような薬と言われていました。私も卒業したての医者として、大学病院で慢性関節リウマチの患者さんの肩関節に注射をし、劇的に効果があり、大変喜ばれたことがあります。

ところが、それから 30 から 40 年たった今日では、リウマチに対してこの副腎皮質ホルモン剤は、初期の炎症をおさえる時に用いるだけで、なるべく使わないようになってきました。それは長期間にわたって使い続けると、骨がもろくなったり、糖尿病がおきたり、依存性が出てきたりと、さまざまな副作用が起こってきて、治療に困難をもたらすようになるからです。

慢性関節リウマチだけでなく、喘息、皮膚病、難聴、ある種の膠原病、難治性の病気などには、現代でも盛んに使われていますが、長期間の使用による副作用よりは、その劇的な効果に注目が行き過ぎているようにも思います。むしろこのステロイド剤でしか治療できないような病気もありますが、われわれはこの副腎皮質ホルモン剤には注意をしておく必要があります。

漢方薬を長くのんで、このステロイド剤から離れることのできた方もおられます。(文責山崎正寿)

